

十字架のイエス・ベネディクト修道会

# 修道院便り

2023年クリスマス/  
2024年新年



「みよ、おとめが身ごもって男の子を産み、その名はインマヌエルと呼ぶ」イザヤ7：14



# 主のご降誕と新年の お喜びを申し上げます。



2023年も主のご降誕を迎え、新しい年を迎えようとしています。コロナ感染の心配は消えないとはいえ、社会の日常生活が戻り、当修道院でも、公開ミサが再開し、黙想にいらっしゃる方々も増えて、活気が出てきました。そして今年もまた皆様からの物心両面の温かい御援助をいただき、本当にありがとうございました。

さて、2024年は本会にとって、歴史的な年となります。

秋には、聖バチルド・ベネディクト会との合併が正式に宣言されることになり、十字架のイエス・ベネディクト修道会は、そこで消えることとなります。といっても、外的な生活様式、精神、霊性は何も変わりませんので、私たちに悲壮感も喪失感もなく、新しい未来の修道会のあり方に希望をもっています。

これからも皆様との友情に感謝しつつ、神のみ旨を求めて、歩み続けることができますようお祈りください。

来る年もどうぞよろしく願いいたします。

平和の元后修道院 姉妹一同

# フランス滞在記

Sr 鈴木喜代



1月31日～3月1日つまり2月の一ヶ月間、十数年振りに本部修道院を訪問した。2024年秋には、バチルド会に合併することが決まり、白子からもこの会を体で感じて知った方がよいという総長の意向で私が行くことになった。

着いて間もなくの2月2日は主の奉獻の祝日。終生誓願式が行われるということで、姉妹3人で電車を乗り継ぎ40分位でバチルド修道院に着いた。街の中にあるとはいえ建物も大きく静かだ。にこやかに姉妹たちが迎えてくれた。

聖堂の高い天井はアーチ型で伝統あるものだった。式は全体をパイプオルガンの音色が響き渡り、深い祈りとなって荘厳だった。式が終わり、昼食はバイキング式でテーブル間を自由に行き来できるようになっていた。この日の立願者はベナン人（アフリカ）なので高いトーンで口笛を吹き手拍子を叩き歌いながら「さあ～みんな一緒に入って…」と。早速、加わったのはここの院長さまで近くにいた若い夫婦から赤ん坊をサッと抱いてあやし、腰をひねりながらこの踊りの中に入ったのです。私はびっくりすると同時に心があたたかくなった。参列した姉妹たちを見ながらベネディクト会の親しさを感じたのでした。

さて、本部修道院で再会を喜び合った姉妹たちは、お互いに年を重ねたが、皆元気で本当に嬉しかった。老齢の姉妹たちの元気なのには驚いた。92才の姉妹は毎日、電動スクーターに乗ってポストまで使いをしている。80代もまだまだと労を惜しまない。特に若手の姉妹（40代～60代）たちに会えたことは、事の外嬉しかった。フランス人はもとよりタンザニア2人、ケニア1人、アメリカ国籍ベトナム人1人、セネガル1人、最年少は38才のフランス人。元気に「祈り、働け」を生きている。

ここで私が最も感銘を受けたのは、1960年代に起こったサリドマイド薬害で大きな障害を持って生まれた姉妹に初めて会った。体は小さく障害は大きい。しかしながら特注の電動車イスを乗りこなし、パソコンもこなし、フランス刺繍も上手と聞いている。介助を受けながらも自立しているし大人だ。彼女は現在、本部修道院の総会計の仕事を担当している。

滞在中、私は体の自由が衰えている姉妹の部屋の片付け、整理を何日もかけてさせてもらった。庭仕事にも汗を流し、昼食片付けの後には電動スクーターに乗ったり、広い庭をくまなく歩きながら自分自身の耕しもできたかなと思っている。帰るころには庭の草木も芽吹き始め、一面に白い雪割草の花が頭を出していた。

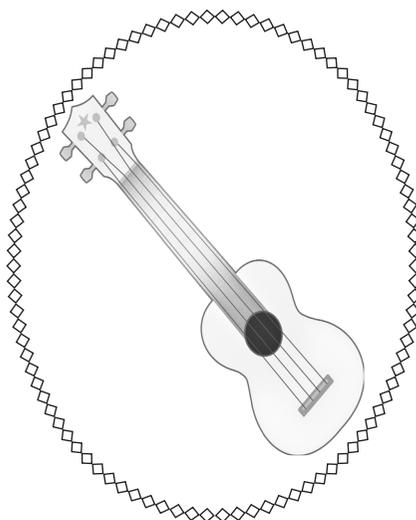
私が白子に帰ってほどなく、フランスでスクーターの乗り方を教えてくれた87才の姉妹が、見事に大きく伸びて咲いた雪割草の花を写真に撮り、メールで送ってくれた。本当に嬉しかった。

・・・という訳で、神の計らいに賛美と感謝。



# 土曜学校の思い出

Sr. 大場幸子<sup>さち</sup>



今年の5月21日号「こじか」（オリエンズ宗教研究所出版）に、私たちの会の記事が載りました。「こじか」はかつて、私が土曜学校を担当していました時に、この雑誌を教材に子どもたちと聖書の勉強をしていましたので、土曜学校の思い出をここに書きたいと思います。当時の「こじか」に“俳句の心”というページがありました。オッカーの司会で子ども達が投稿した俳句や絵写真等をおもしろく紹介してくれていました。

2ヶ月後の“こじか”に各自がつくった俳句が載るとみんなはそれを見て眼は輝きうれしそうでした。本当に楽しい一時でした。

ある年、一人の神父様が修道院に数ヶ月滞在していましたので、私は土曜学校の様子を観ていて欲しいとお願いしました。その日、私がウクレレを弾きながら、「イエスさまはすばらしい」他を歌っていました。と突然一人の男の子がつかつかと私の前にきたと思うと、ウクレレをひったくり取って床に寝ころびロカビリー歌手の真似を شدしたのです。私は何度もウクレレを返してくれるように言ったのですが、ジャンジャン弦を鳴らして、メチャメチャな歌を歌っているのです。突然「ヒロ！何やってんだ！」と怒鳴る声が飛んできました。みんなその声の方に振り向きました。それから神父様はヒロ君を御自分の背丈の高さにまで持ち上げて下に投げ落とすように数回したのです。ヒロ君は恐怖で真剣な顔をしていましたが、私はそばで見ている、神父様は力を抜いているのが分かりました。その体罰が終わるとヒロ君は神父様の前にチョコンと正座をし、膝の上に手をおいて、「神父さん、うちにお酒あるよ。」と言ったのです。私は吹き出しそうになりました。神父様とその子の眼と眼が

合うと神父様は深くうなずきました。

その日の勉強が終わってから、私は神父様に言いました「ヒロ君、ひるまなかったですね。」（私はヒロ君がひねたり、意固地にならなかったことを言いたかったのですが、こんなことばになってしまいました）神父様は言いました。「愛情だよ。」と。

神父様は今は天国です。きっと子供たちと私たちのことを思い出していることでしょう。みんな今は結婚したり、仕事などで白子を離れ、会うことはありませんが、小学校の時修道院の土曜学校によく行ったなあと思い出してくれたらうれしいです。そこからいろいろと発展していってくれたらとも思います。教会行事に合わせて子どもたちと一緒に撮った写真を見ながらその時々私のうれしそうな顔、楽しそうな顔をしげしげと見てしまいました。



# 寿命

Sr. 関 雅枝（在フランス）



気が付いたら八十歳になっていた。傘寿とは数え年の 80 歳のことと聞いていたから昨年の夏から確かに 80 歳ムードは始まっていた訳だが、なんとなくその事実を実感し出来ていなかったのであろう。それに昨年は金祝とその準備の黙想や、会の全体会議、更に入院闘病と結構忙しかったからかもしれない。歳と言うと自分が幾つ位と感ずるかにも掛かっていると言う。だんだん体力が落ち

て体調も余り良くないとそろそろ死んでも可笑しくないなと感じ実際もう数年前から葬式に使うてほしいみことばを選んだり、昨年は特に同じ世代の古くからの知人や姉妹、司祭方を失ったりしていたので余計永遠への旅立ちを待ち望む気持ちが煽られたのかもしれない。でもこの話は靈的確信以前のものだと思ってほしい。私に限らずもう何十年も神探求の生活を送って来た者はそれなりに未来の世界への考えを持っているだろうし、またそうあって欲しいが、それを超えたものがあるみたいで、称して言うならば「寿命」とでも言おうか。私の隣の修室にいる姉妹はもう何十年前から次は彼女の番と言われているが 90 代を超えて細々と際限なく生き続けているし、石原慎太郎氏の奥様はご主人を天にお返しした後、四十九日をも待たずに逝かれたそう。そうした方々を称してご自分の使命を完うされた、或いはまだ残されていることがある等と言う。数年前まで、近くしている姉妹によると私はそんなに長生きできないと言ってくれ私自身も早くこの身が解かれるのを望んでいた。そうして臨んだ金祝だったし、そのあとの病気だったので OK、あとは時を待つばかりとニヤニヤしたのだが、どういたしまして、今年に入ると少しずつ元気を取り戻していくではないか。捕らぬ狸の皮算用…！では私は本当に幾つ位と感ずているのだろう。自分が今意識を超えた時点で想っている自分の歳、早く死にたいと心

底願っているつもりで実は生にしがみついている人のひとりなのだろうか。

まだ40代のころ受けた個人黙想の時に見たお風呂に関する夢があった。私は多くの人たちと共に温泉にいるのだが一緒に湯に浸かっている人たちが皆中年のおじさんやおばさんだったのである。それを話したら同伴の司祭が可笑しそうに笑って「やっと気がついたな」と言ったのである。えっ、そう言われれば自分ではもっと若いつもりだった…と気がつかされた。それに修道生活では夫もなく子供の成長ぶりも見ない、先輩姉妹も後輩姉妹も入会年順番に従っての席順である。年下の先輩も年上の後輩も珍しくはない。だから自分の年配を簡単に自他ともに無視してしまうのであろう。そう言う意味で私は自分の歳を実際のそれより若く見ているようだ。

でも聖ベルナルドをはじめ、アトスのシロワーヌ等の多くの聖なる大人のモワヌ、モニアルが神とのかかわりを度々恋人とのそれのように表しているし、何より雅歌に於いても教会はキリストの花嫁に留まるだけでなく、我々一人ひとりのかけがえのない存在で、他人が何と言おうともイエスは私のかけがえのない近い存在であり、同時に私が帰依する神である。そうして多くのキリスト者は本来永遠に若い恋人同士…と言えないであろうか。但しこう表現すると甘いお話に聞こえるかもしれないが、愛し合う者同士であるが故に辛苦を共にする友、十字架の同士でもある。この事実を実生活においてどの様な関係に召されているかつまり、永遠に若い神の自称永遠に若い花嫁としてどの様に恋人、師匠の跡に自分の足を重ねるかを問われていると日々想っている。

神探求のいろいろな零性を自由に選択できる現在のキリスト教である。禅、内観等々、日本だけでなく私の永年いるヨーロッパでも云々されている。ヨーロッパの場合マンネリ化してしまったキリスト教に満たされず仏教に回宗する人や、益々人口を増していくイスラム教徒もいる中、昔ながらのキリスト教の教義の内に深い真理を見出しているひとが結構いる。公会議以前に養成された姉妹たちが私たち修学期の者に聖書学、神学、教父学などを教えてくれたのだが、始め私は、彼女たちは内面に入ることができるのかな…等と意地の悪い考えを持ったりしたものだった。ところがもう全員亡くなってしまった彼女たちの実に充実した晩年の内面性を目の当たりにして感歎したのを覚えている。私自

身「雅枝さんも心の内に入れるようになるといいね。」等との批評を他の人に書いた手紙を通して聞いているが、要するに神がその人をどの様な道を通してご自分の懐に招き入れられるかの問題だから、“内緒！”と言ってあげたい。

ある日私の日が満了してお迎えが来る時、「一緒に主を探してくれてありがとう。またいつかね。」と言えるなら、それが私の寿命だと思っている。



# 『ひとり、ひとり』の使命

Sr.Maria 光恵（佐久間光恵）

四階の病室の窓から、外を眺めると、深緑の森が連なり、青い空には白い雲が刻々と形をかえて流れている。時間が止まったかのような一時・・・室内は涼しいが、外は暑いのでしょうか。病室では、看護師達がてきぱきと働いている。確かに忙しくは働いているが、セカセカしたり、不満だらだらという仕種は、どこにも感じられない。彼らにも、感情はあるでしょうに！

教育とか訓練だけで、そうなれるのだろうか。・・・あるいは、一人一人が確固とした使命感を持って働いているのでしょうか。・・・確かに、命に関わる重要な役割をだれもが自覚しているでしょう。あるいは、生活のため！ という理由もあるでしょう。命を支える人、受ける人を見ていて、私が感じたことは、どちらにも使命が与えられているという現実です。それぞれ与えられている立場で、命を生きること・・・と私は思った。

神がモーセに『はきものをぬぎなさい。そこは、聖なる場所である。』・・・とおおせになった。場所とは、“その時” その時間でもあるのでしょうか。

99%お世話になっている人にも、使命がある。その場で、その時を生きる、という使命が・・・そこに神が共におられるから！ 見た目がどうであれ、気高く、美しく、尊いものなのだ。人生の中で、重要な役割を持って働く時もあるでしょう。全くの無力の中に、ただ呻くだけのときもあるでしょう。

“ 神の思いと、人の思いとは異なる。 ”

先生方、スタッフの皆様  
ありがとうございました。感謝致します。  
一人一人、心をつなぎ、手をつないで、  
自分の使命を生きぬこう。



## 「聖ベネディクトの戒律第 35 章厨房の週間担当者について」の体験記



Sr. Maria 洋子（穂積洋子）



私たちの修道会は聖ベネディクトの戒律を採用しています。この聖ベネディクトの戒律は緒言から第 73 章までである長いもので、今年の修道院便りで皆さまとお分かちしたいと考えたのは、この戒律の中ほどにある、厨房で働くことについて、つまりはお台所で働く修道者についての部分です。

初めにお断りしておきますが、私自身はお台所の責任者ではなく、ただの「助手」（というよりはほとんどボランティア的立場）に過ぎません。それも当然で、修道院に入った約 30 年前まではお料理などほぼ全くしたことはなく、これまで日本の修道院でもフランスの本部修道院での生活の中でも、目上の方々は姉妹たちの大切な健康を守る責任上、私をこの尊い係に任命するというような思慮に欠けた行動をとることはありませんでした。そして私自身にしても、当然のこととして、お料理を食べさせていただく側にいることに満足していました。

ところが、日本に帰国してからしばらくして、修道院の人数の減少や高齢化、外部からこの分野でお手伝いいただける人を見つけることの困難さ、などなど諸事情が重なったために、私などのような素人も月に何回かはこの聖なるお仕事を任せざるを得なくなったのです。せめて毎日ではないことは私にとっても姉妹方にとっても慰めで、はじめは一番文句の出にくい（つまり美味しくなくても不平を言いにくい）金曜日になりました。金曜日は伝統的に犠牲をお捧げする日ですから、この日ならたとえ食べられそうなものがほとんどできなくても、後は休むだけですから忍耐しやすいということだったのかもしれませんが。とにかく、こ

うして私の人生のお料理初体験（ちょっと大げさですね）の日々が始まりました。

初めのうちは台所のどこに何があり、みそ汁の具を何にするかも分からず、幸いにも長年台所係長をしている姉妹や、本物の調理師の資格を持つ姉妹や、神さまからお料理のタレント（才能、お恵み）を豊かにいただいている姉妹方に助けていただきました。そして、自分の当番日には食べることも、姉妹方がどれだけ食べてくださるかが気になり、残り物が多いとがっかりと申し訳なさで落ち込みました。

しかし、やはり数をこなしていくうちに何となく、こうしたらいいのかしら、それともこうしてみようかな、など考える余裕が出てきて、初めのうちは恐ろしくて味見さえできなかつたのに（味が変わったとしてもどうしたら直せるかが全くわかりませんでしたから）、少しずつ大胆になってきました。その上、優しい姉妹方は、こっそりと「美味しかったよ」「また作ってね」などと囁いてくださるようになりました。こうなると、私の実験癖とおだてに弱い傾向が頭をもたげてきて、レシピを探し、出来るだけ安く済むように材料を変えてみたり（これは失敗した際の被害を最小限度に抑えるためですが）、一生懸命に取り組めるようになってきました。

こうして何とか頭と身体を使って、「お食事を用意する」ようになって、私は初めて聖ベネディクトの戒律の第 35 章第一、二節を理解することができるようになりました。こうあります。

「修友（修道者のこと）はお互いに奉仕しなければなりません。そこで病のある者あるいは何か重要な仕事に従事している者以外は、厨房の勤めを免除されることはありません。なぜならこの勤めのためにより報いが豊かに与えられ、愛がはぐくまれるからです。」 また、この仕事は重労働ですから、必要なら助手をつけるように、とも書いてあります。

私のお台所体験での一番の心の変化は、このお仕事がどれほど愛を深めてくれるものか、ということでした。姉妹方の心と身体に必要な物を、自分の働きで提供できるのだ、ということをお聖ベネディクトは教えてくれました。姉妹方のために自分の労力をお捧げすることは、神さまがすべての生きものの命をささえてく

ださっている、その廣大無辺の愛に、ごくごく小さくつつましくであっても、参与することなのです。そして、この体験は私の母がどれほどの愛をこめて私たち子どもを育ててくれたかについても、改めて感謝することへとつながりました。

残念なことに、世の中には命を支えるに足る食物を得ることができない人々がたくさんいます。その人たちにも神さまの愛が届くように、この祈りを心に抱きながら、次回のメニューを考えています！

聖べ  
ネディクトの戒律。  
子よ、心の目を傾け、  
師の教えを謹んで聴きな  
さい。そして慈しみ深いあ  
なたの父の勸告を喜んで  
受け入れ、これを積極的に  
実行にうつしなさい。この  
ようにして、無気力で、  
従順に欠ける生活を送  
り過ぎかかってしまった方  
のもとに、服従の労役を通  
して戻るのです。そこで今、真  
の王たる主キリストに仕える  
ために自らの意志を捨て、服従  
いう最も堅固で輝かしい武器を と  
には、それが誰であっても、次の言葉を伝えま  
す。まず、どのような善いおこないを始め  
るにあたって、神がそれを完全に導い  
てくださるよう、心を尽くして祈りなさい。  
主は、今やわたしたちを子として受  
け入れてくださったのです。今後、わ  
たしたちも悪いおこないによつて主  
を悲しませることがあってはなりません。  
わたしたちは常に、主から授かっ  
た贈り物を用いて主に支えねばなりま  
せん。そうでなければ父である主は  
怒り、ある日子であるわたしたちの  
家督を剥奪するばかりではなく、恐  
るべき主として、わたしたちの犯し  
た悪行に憤り、主に従い栄光にいた  
ることを拒む悪い僕として、わたした  
ちを永遠の罰に処せられるでしょう。  
そこでわたしたちは、「今こそ、眠りよ  
り起き上がる時である」という聖書の  
言葉に促されて、ここに立ち上がりま  
しょう。わたしたちの目を神の光に向  
けて開き、日々私たちに声高くさし  
てくださる神の声に目を傾けましょ  
う。すなわち、「今日神の御声を聞いた  
ならば、あなたの心を頑なにしては  
ならない」。また、「聞く耳のある者は  
、聖霊が教会に語るところを聞きなさい  
とさとしておられます。そして主は  
何を語られたのでしょうか。「子よ、来て  
わたしに聞きなさい。わたしはあなた  
たちに主を畏れる道を教えよう」。生命  
の「光あるうちに走り」、死の「闇に追  
いつかれないようにしなさい

# 共に生きる

Sr. Francisca (岡島静代)



11名の姉妹たちがこの白子の共同体に生きている。北は北海道から南は四国の出身まで、日本各地からここに集まっている。生まれも育った環境も、それぞれ違っている。

さらに、フランス本部修道院に行けば、そこにはフランス各地からはもとより、世界中の国々から来た姉妹たちが一緒に生きている。今年6月に出張で本部に滞在したとき、あらためてその不思議さに驚いた。

スペインから、オランダから、アフリカのタンザニアやケニヤから、スイスから、アメリカから、以前はベトナム、シンガポール、フィリッピン、ドイツ、イギリスからの姉妹達もいた。皆、母国からフランスへやってきた。

今年のフランス滞在中、そのうちの何人かと話す機会があり、生まれ故郷や生い立ちなどを聞いた。日本の田舎で生まれ育った私とは、全然異なる国々と環境、本修道会に入会しなかったら、決して出会うことはなかった姉妹達。メンタリティも考えも、感じ方も、全く異なる、その一人一人がキリストに従うため、本修道会の精神に惹かれて、はるばる自分の国を離れて、今ここに一緒に生きているということは、どれほど驚異であるかをつくづく思った。

それも、同じ生活を分かち合い、同じ精神、同じ理想、同じ愛で結ばれているということは、ただただ、神のみわざとしか思えない。

白子の共同体の姉妹達も、郷土や環境や家庭の全然違う場所からやってきた。私たち一人一人は、自分の生い立ちから沢山のことを吸収し、それぞれの人生の中でそれぞれの価値観を培われてきた。

そして、今、ただキリストに従うという一つの目的のためにここにいる。共に生きている。違いを超えて。





Sr 船田 由美



フィロカリア（1）師父大アントニウス「人間の品性につい

て・及び高潔な生について」170の断章より

＊ 132 神は人間にのみ耳を傾ける。神は人間にのみ自らを現わす。神は人間を愛し、人間がどこにしようとも神もまたそこにいる。人間だけが、神を礼拝するに値する者とみなされている。人間の為に、神はご自身を変容させる。

＊ 100 人間は善いものはすべて、善そのものである神から受ける。この事の為に人間は神によって創造されたからである。これに対して、悪いものは人間自身が身に招く。また自分自身の内にある悪徳、欲望、そして愚劣さから。

師父大アントニウスの言葉をいただきながら、藤原神父様に一緒に歩いていただいた祈りの日々、ゆっくりゆっくり、恵みのうちに過ごせました。

神はどれほど善い御方でしょう。それに比べてわたしは神から頂いた自由意志を自分の欲の為にのみ使い神を苦しめ続けています。ほんの少し気づかせていただきました。我が主イエス・キリスト罪人なる我を憐れみたまえ。

「わたしの名は、エミリーよ」

＊ 62 あなたが自分の住まいの扉を閉めて一人でいる時、神から各々の人間の為に指定された天使があなたと共にいるという事を知りなさい。眠ることもなく、欺かれることもないこの天使は、常にあなたと共にいる。彼は全てのものを見ており、暗闇によって妨げられることもない。彼と共にあらゆる場所におられる神もそこにおられる。

今年に入って間もない頃、わたしの守護の天使のことを思っていると「わたしの名は、エミリーよ」と答えてくれた。7/24の手術後、とても辛い時エミリーは真剣な表情でわたしのそばから離れず、私の苦しみを共にしてくれた。エミリーありがとう。入院中、わたしはいつも11人と一緒だった。御父、イエス、聖霊、母マリア、聖ヨゼフ、天国の5人のちびっこ天使達、そしてエミリー。皆で御父に祈る時、大きな十字をきって心の中で大きな声で祈った。恵みの日々だった。

十字架上のイエスの叫びを聴いていないわたし。

「聴く」それは愛が無くては出来ない。マザー・テレサは言われた。「愛の反対は憎しみではなく無関心です。」自分には関係ないからとすぐに無関心になるわたし。愛のみが全てを可能にしてくれる。わたしの愛を育ててください。一番身近な人の痛み、苦しみに気がつき祈らせていただけるわたしに少しずつなっていきたい。

我が主、イエス・キリスト罪人なる我を憐れみたまえ。



# 救急隊員の方々に感謝！

---

Sr. Veronica 高橋和子



私たちの修道院をはじめ近所でも、救急車のお世話になることが多くなりました。

私たちの修道院でも、今年は3度お世話になりました。いつも感じさせられることですが、救急隊員の方々の ” 明敏さと優しさ！ ” に、感謝で胸がいっぱいになります！

八十代の後半の人生を歩んでいる現在の私にできることは、神さまと、出会う一人一人の方々に

「ありがとうございました！」

「ありがとうございます！」

と述べつつ、頂いているこの奉献の道を歩み続けることだと思っております。



# 「読書」

Sr. 赤井 <sup>ゆき</sup> 幸子



修道院では、食事中（昼と夕）に読書を聞きながら食事をします。

「身体に栄養を摂るように心も読書を聞くことによって養う。」と会則にある。

最近「ニューマンの生涯」につづいて故森司教の著作「今を生きる」を聞いている。主日や祭日や黙想会中は音楽を聞いている。

茂原の一人の信者さんの朗読奉仕、時々共同体や他の場所での講話をテープに入れたものも聞く。私も時々テープに吹き込んでいる。私の愛読書の一つ、レイチェル・カーソンの著作「センス オブ ワンダー」も数年前に聞いた。この本を最近、又改めて個人的に読書で読んでみた。1996年の発行で2019年に63刷となっているから多くの人々に読まれているとわかります。

この本は、著者の最後のメッセージとして、地球の美しさや大自然の神秘、それを発見するよろこびが書かれています。

今年の夏は今までにない暑さで、7、8月は雨も白子町ではほとんど降らず、庭の畑や草木もカラカラ。9月に入って台風がドカッと大雨を降らし、異常気象という。これから地球はどうなっていくのだろうと不安になる。ニュースは戦争が世界各地で起き、平和を願う人々の声が、かき消されそうな今日であっても現実から目をはなさず、大自然の宇宙の大きさ。夜空の月と星。雪の結晶。いろいろな木の芽や花、小さな生きものなど、観察し、観想し、神秘や不思議に目をみはる感性をもって『人間を超えた存在を認識し、おそれ、驚嘆することは意義深いなにかがある』と著者は言っています。

私たちは日々、神に賛美と感謝をささげる祈りの時をもつ。

核兵器でこの地球が滅ぼされるかもしれないということは、地球の歴史が何億年もかけてかけがえのない生命の誕生、その神秘と美しさがわかっていないのだと思う。



## 変わらないもの

Sr. Maria Faustyna (小林清美)



猛暑という言葉を通り越してしまうような暑さだった今年の夏もようやく通り過ぎて、秋の風が感じられる毎日がおとずれました。

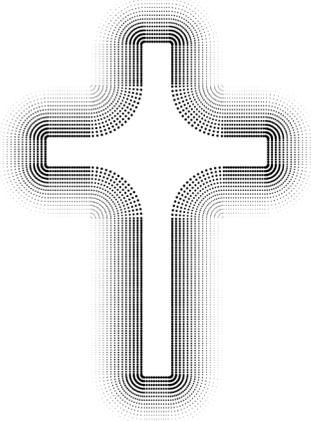
5月中旬から3か月間、フランスの修道院に滞在していて帰国が8月中旬だったため、今年は不快な梅雨も体験することもなく、帰国する頃には、暑さも一段落しているだろうと勝手に想像していたのですが、実際には成田空港に降り立った瞬間に空気の悪さと、湿度と気温の高さにあきれてしまうほどでした。すでにフランスは、8月は朝、晩は上着を着用してもよいくらいだったので、時差ボケよりも気温の差のほうが、つらく感じました。それでも、時間の経過とともに少しずつ暑さが和らいでいきました。

空気も通り過ぎていく風も、あきらかに夏のものとは変わっていくなかで、絶対に変わることはないものがあります。それが、神さまの愛であり、いつくしみだと思います。神さまは、本当に不思議なやり方、また神秘的な方法で、私達一人ひとりの中にいつくしみを注いでくださいます。それは、何ものにも代えられない恵みだと思います。そのいつくしみは、必ず私達を支えてくださいます。



# 家族の訪問

Sr. 金井玉枝



9月の日曜日午後、東京から、弟とその娘知花ちゃんと私の妹が会いに来て、実家の蓮根<sup>はずね</sup>商店街の様子を話してくれました。

弟の店は、商店街の中央にあり、1店舗独立していますが、飲食店以外は、マーケットの中に組み込まれているとのことでした。

子供の頃は、母の戦死した兄の地所にその家族と徴兵にとられなかった私の父の家族が16名でトタン張りの木造家屋に和やかに暮らしていました。ときわ台と前の奥には牧場があり、大きなトラックに牛を載せて、とさつ場に運んでいました。店の裏には、広い冷凍室があり、牛の半身の肉がぶらさがっていました。父がその肉をうりさばく卸の仕事をしていたので、オートバイの助手席に乗せてもらってお得意さんの店を巡りました。

弟の時代になると、カット肉を運んでもらい、店に陳列するようになりました。姉、妹そして弟は、父の店を手伝いましたが、私は先天性緑内障で母に連れられて、眼医者通いにあけてくれています。

今回、応接間で私に妹が「元気だね」と驚いていました。近況を伝えあって主に感謝した一日でした。

私の家族にも信仰の恵みをいただきたいと願っています。

# 御言葉の氾濫

エンマヌエル 野口(トラピスト)



私たちは、修道院共同体で生活する限り、毎日、溢れるばかりのみ言葉に接している。典礼の頂点であるミサ聖祭の式文や朗読、1日に何度も聖堂に共に集って捧げる聖務の中でもみ言葉は必ず読まれ聞かれる。また、靈的読書や食事の間の朗読など、1日の間でどれほどの御言葉に接していることか。主イエスのみ言葉に限定すれば、誰もが備えている福音書を広げれば、どのページにも主が使徒たちや民に話された御言葉やたとえ話をいつでも繰り返して読むことができる。それが私たちの日常と言えよう。

しかし、主イエスや弟子たちが福音宣教に旅をしている途中、そこで出会った人々は、人生の中でその日、その時、その瞬間にしか主の話を一回限り聞く機会を得たのではなかつたらうか。福音書にはさまざまなたとえ話や説教が収録されている。私たちは今、それらを串刺しするかのように次から次へと別個のたとえ話や説教をはしごすることができる。そして、今日もまた、聖堂では次から次へと主の御言葉が氾濫してるかのようだ。

私は思うのだ。古の民衆は主イエスの一回限りのたとえ話や説教を聞き、それを心の中に忘れないよう焼き付け、人生のさまざまな局面の中で思い出し、黙想し、繰り返し味わった。それだけが彼らにとって主の御言葉だったからだ。主が語られたみ言葉を何度も思い起こしながら、そこに隠されている意義や神意を生涯をかけて解き明かそうとしたのではないだろうか。現在は聖書学や語学、オリエント学の豊富な研究成果や、教父方の靈的な解き明かしを自由に利することができ、興味さえあれば、深い山に分け入っていくかのような聖書解釈学を学ぶこともできる。時代も文化も大きく異なる私たち現代の日本に生活する者が、相応しく聖書を理解す

ることはそれなりに案内者や指導者が必要なのかも知れない。

しかし、この御言葉の氾濫の中にあつて、私たちは果たして主の御言葉を聴いているのだろうか。読んだだけで、聞いただけで理解できたような薄っぺらな御言葉理解が頭の上を毎日滑走し、次から次へと御言葉が消費されていく日々違和感を覚えずにはいられないのはなぜだろう。

福音書の中の一つの段落を1日中、数日間、数週間、数ヶ月、一年、一生涯かけて心の中に留め、主イエスとの内的な対話の中で御言葉を心の中で転がすように味わい続けても良いのではないか。いや、その方が、実は福音書時代に主の御言葉を受け取った民衆のやり方だったのではないかと思う。

主の御言葉は使い捨てる言葉ではない。すべてを一瞬にして理解し納得できるものでもない。「種まきのたとえ」を聞く、「山上の垂訓」を読み返す、当時の人々はそれだけしか聞かず、主イエスの話された全貌を知ることは使徒たちだけに許された特権のようにさえ見える。今、私たちは、あらゆる現存するあらゆる主のみ言葉をひもとき、いつでも再読することができるがゆえに、逆に、今日与えられたみ言葉をどれだけ真剣に受け止めることができるのかが問われている。ミサ聖祭が終わった途端に、朗読された福音書がなんだったのかさえ忘れてしまう私たちの弱さを、どうか主があわれみ、いつくしみ、導き続けてくださいますように。





## 2023年における主な事柄

毎月ルイス<sup>まぜきな</sup>真境名神父さまが告解のために東京から来てくださいました。  
毎月藤岡氏による音楽レッスンがありました。

- \* 12月30日～1月4日 廣松千鶴子さん滞在
- \* 1月12日～2月1日 ジュリアーノ修道士の滞在と聖書講義
- \* 1月4日～2月28日 竹花育子さん滞在
- \* 1月31日～3月2日 Sr 鈴木喜代フランス本部に滞在
- \* 2月13日～14日、20日 野口神父さまによる新しいミサ曲のレッスン
- \* 3月2日～3日 ドミニコ会渡辺師訪問
- \* 3月11日 Sr. 塩沢幸子フランスより帰国
- \* 3月13日～14日 杉本ゆり氏によるグレゴリオ聖歌の指導
- \* 3月25日 Sr 塩沢幸子、正規献身者として、終生の誓約宣立
- \* 4月13日～14日 Sr 高橋和子入院
- \* 4月27日～5月10日 フランス本部より Sr. Bertille Pacom 訪問。
- \* 5月3日～5日 献身者の研修会 3名の献身者参加
- \* 5月10日～8月9日 Sr 小林清美はフランス本部に滞在。
- \* 5月15日～24日 フランシスコ会、村上師指導による5名の姉妹たちの黙想
- \* 6月5日～6日 杉本ゆり氏によるグレゴリオ聖歌の指導
- \* 6月7日～7月1日 Sr 岡島静代フランス本部へ
- \* 7月10日～11日 本会 HP でお世話になっている小松氏夫妻滞在
- \* 7月21日～8月26日 Sr 船田由美入院
- \* 8月15日 花火大会
- \* 8月24日～9月2日 Sr 佐久間光恵入院
- \* 8月26日～9月2日 献身者佐々木あとみさん黙想のため滞在
- \* 8月30日～11月8日 Sr ミカエル高橋滞在
- \* 9月18日～20日 野口師指導による新しいミサ曲のレッスン
- \* 9月23日 テゼの歌と祈りの集い
- \* 9月29日～30日 レデンプトール会、下瀬師来院、初ミサ
- \* 10月6日～13日 藤原師指導による、7名の姉妹たちの黙想
- \* 10月15日 内観研究会の方々と共に、藤原師の司祭叙階金祝お祝い

- \* 10月30日～31日                   杉本ゆり氏によるグレゴリオ聖歌の指導
- \* 11月20日                       御宿霊園において茂原教会主催の墓前ミサ。二人の姉妹が参加
- \* 11月22日                       消防署指導による火災避難訓練





十字架のイエス・ベネディクト修道会  
平和の元后修道院

所在地 〒299-4213

千葉県長生郡白子町八斗 1805

電話 0475-33-3829

FAX 0475-33-7067

HP <http://www.benedictinesjc.jp>

